
王子様の思うがままに

真咲静夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王子様の思うがままに

【Nコード】

N8478N

【作者名】

真咲静夜

【あらすじ】

秋山克乃、30歳、独身。

同居人で従兄の子にプロポーズされ…

s i d e 克乃（前書き）

突然、あまあまな恋愛が書きたくなりました。
好物の年の差、身分差、あまあまを詰め込み中。

side 克乃

皆見ている中、私はその瞬間、頭が真っ白になり、全く動けなくなった。

秋山^{かつの}克乃、30歳

ムライ商事総務課の^{こつぱね}小局である。お局様までには到らないが、下に入ってきた子達も増えてきたし、だいぶお局に近づいてきたのではないかと思う。

「ほら、お迎えが来てるわよ。」

そうニヤニヤした笑顔を浮かべるのは、同期の友人、^{さやか}牧原清香。清香が顎で指した方には、私の同居人、^{りひと}秋山理人がある。

「克乃さん。お疲れ様でした。」

「理人君、こんばんは」

「牧原さんもお疲れ様でした。」

「今日も綺麗なものが見れて、お姉さんは疲れが吹っ飛んだよ。」

豪快に笑う清香：爽やかそうな名前が泣くよ。

オヤジに磨きがかかった清香が、王子様に姫さん返して、邪魔者はさっさと消えるぜって、オジサン臭く消えていった。

私はとりあえず、理人君を見た。

秋山理人は私の従兄のお相手の連れ子で明日で18歳になる。

従兄、皐月兄さんが結婚したのが4年前、理人君は私が独り暮らししている場所から近い高校に通っている。

こうして私を迎えに来るようになったのは1年前ぐらいから…

お付き合ひしてた人から振られ、心持ち荒れていた。

振られた理由はいつも通り、彼に見合いの話が来て逆玉。すんなり結婚するために、私とは、はい、さようなら…

3回目ともなると、荒れもするでしょ。

迎えに来てくれた理人君はハーフと聞いている。

どこへ出しても自慢ができる程のイケメン君で、母親の鈴音さんりんねに付き合い、各地を転々としていたらしい。

黒髪に青味がかった瞳、すらりとした体軀に薄めな唇。

理知的に見えるシルバーフレームの眼鏡。

その頭脳は近所の高校はもちろん全国屈指。

鈴音さんの元旦那さんの1人から習ったとかで、クンフーの使い手…つまり、運動神経も拔群。

まさに王子様。

そんな王子様が毎日迎えに来るようになったおかげで、会社前はいつも女性の山となる。

清香には王子様と同棲なんて、どうなんだって言われるけど、同棲じゃなくて、同居。

一回りも下なら、恋人なんて気分にはならないし、鈴音さんの年齢が36歳なもので既に息子気分だ。

「理人君もお疲れ様。高校から毎日迎えに来なくてもいいのよ?」

「克乃さんに今晚のご飯を奢ってもらおうと思って。」

いつも克乃さんは仕事で疲れているからと、食事の用意をしてくれ

る理人君。
とっても珍しいことを言う。

「あら、明日、豪勢に食べにいこうと思ってたのに。」

「明日は僕が精一杯美味しいものを食べさせてさしあげます。今日は17歳、最後の日ですから、今日を克乃さんに祝って欲しいのです。」

なるほどね。

でも…

「明日は誕生日なのに理人君が料理するつもりなの？」

「18歳の誕生日は特別なんだよ。」

「特別？」

「そう。特別。」

そう言って、にいて笑うのがまたニヒルで格好いいと言う周りのお姉様方からの感想ですが、周りなんて関係ないのか、全く気にしてないご様子。

「今日は《ふうふう》のふわとろサクカリオムライスが食べたい気分なんだ。」

《ふうふう》は妙なタイトルな料理が多いけど、その妙なタイトル通りなわりに美味しい創作料理屋さん。

素敵なおに…お姉様が経営なさってます。

「そうだね。私も流れる星のきらめくパスタが食べたいなあ。」

行き先は《ふうふう》に決定。
楽しみ。

「で、昨日は誕生日お祝いして、帰ってきたのよ。」

「あら、その後にイベント無かったの？」

就業時間直前ながら、準備をしながら話をしている。

「イベント？」

「少年が18歳と言う、条件付きながら相手を実に制限できる契約ができるようになったなら、もちろんイベントとはプロポーズに決まってるでしょ？」

「まっさかあゝ。私達、恋人ですらないのに？一回り年下だよ？むしろ息子だよ？」

理人君のお母様は36歳だもの。私と年が近すぎるよ。

「本当に気が付いてないのね？」

「何が？」

「報われなさすぎだ。理人君。」

理人君の完全どストライクっぽいのに、なんて呟く清香。
ありえないって

そんなこと言ってたなら、就業時間のチャイムじゃなくて、いきなり
館内放送がかかった。

―本日、15時より、新社長より挨拶があります。全従業員は第1
会議室に集まって下さい。

繰り返します―

一斉にフロアが騒つく。

新社長って何？！

そんな声が至る所から上がってくる。

しかし、直後に就業時間チャイムがなったため、誰しもが疑問に思
いつつも、何も口出すことがなかった。

せっかく理人君の誕生日だから、張り切って早く帰ろうかと思って
たのに、新社長って何…
…それにしても、理人君たら、彼女居ないのかしら？
この前聞いたら、案外もてないとか言ってたけど…

「の…つの…克乃！」

「え？なあに？」

驚いた顔のまま、ゆさぶってくる清香。
何事？

なんか私、凄い注目浴びてる気がする。

「総務課係長、秋山克乃さん。」

「はい。」

こうして前見てビックリ。

うん。ビックリ。

驚きすぎて、頭が真っ白…どうしょ…体も動かない。
だって…え…な…何？

「克乃さん。」

新社長が私を呼んでる。

ううん。新社長が、こちらに近づいてきてる。

「僕、頑張ったんですよ。誉めてくれます？」

「り…理人君」

そう。

目の前には理人君がいる。

うえっ？何で？

どうして？

「4年前に会った時から、貴女に見合う男になるために努力してき

たんです。何せ、一回り年下ですし」

理人君は私の手を取って、甲にキス。

周りの騒めきを気にしないところは相変わらずなのね。でも、私は気にしたいよ。

「理人君：えっなんでここに？」

「社長になったんです。ここの。玉の輿、夢でしょ？」

確かに理人君に出会った頃は、まだ20代も半ば、まだまだチャンスはあるかもと、そんな叶わぬ夢もほざいてましたが：

「僕と結婚していただけませんか？愛しい人。」

衆人環視の中で（しかも会社だ）、ちょーイケメン年下社長からの公開プロポーズ：いやいやいや、ありえないでしょ？

周りに固唾を飲み込まれながら、見守られ、少し泣きそうだ。

「なんで私？鈴音さんと年も近いし、年上過ぎでしょ？君に見合うような顔も才能も財産も何にもないよ？」

「一目惚れに何言ってもダメですよ。僕は貴女が玉の輿いいあと言った一言で起業しましたし、貴女が快適に暮らせるように家事もせずにはいられない。」

確かに：

思い起こせば、痴態、悪態、醜態の数々：

「いやいや、何故そんなに私のことが好きなの？」

好きになられる要素の少なさに脱力以外何事もできない。

「一目惚れなんです。」

その目の神経さにくらくらする。その真摯さに…
その情熱に…

もう、どうしたらいいのかわからない。

「克乃、頷いちゃえばあ？若くてイケメンの金持ちつくし系男がここまで言ったら、汲んでやってもいいんじゃない？」

…若くてイケメンの金持ちつくし系…言いすぎだと思うよ、清香さん。

誰もが動けない中、ニヤニヤニヤニヤしながら、私の背中をドンと叩く清香。

けして助けてくれるわけではない。

「…お付き合いからなら…。」

「……………本当ですか？」

ぽつり呟いて出た言葉に、歓喜する理人君。

その笑顔の可愛らしさと言えば、周囲が老若男女問わず騒めいている。

「なんだよ、結婚に頷かないの？」

他人事だと思って、オヤジ全面に出し過ぎでしょ？清香…

小さな声でこそつと言ってくる清香に同じく小声で返す。

「考えてみてよ…ここ5年、恋愛にあまりにもついてないから…」

その小声での答えにニヤニヤを深め、耳元で内緒話をするように言う。

「ばかねえ、決まってるじゃない。一目惚れした地位ある男がよ？20代後半、恋愛に結婚がつくようになる女が他人と恋仲になるなんて、1番嫌がりそうなことじゃない。」

「まさか…でもお見合いの斡旋なんて…」

ちらり理人君を確認すれば、はにかんだように首をかしげる。

「できるでしょ？克乃、舞台を見て」

舞台を見ると、こちらを苦笑し気味に見ている壮年の男性2人…まさか…AKIの社長？それにDBの社長…日本に名だたる会社の社長が2人…

「あの2人はAKIYAMAグループの企業の社長…つまりは？」

理人君と接点があるの？

「本当に説明聞いてなかったの？この会社はAKIYAMAグループ傘下に入ることになったの。しかも社長が彼、理人君でグループ統括自らが社長就任って…」

…えええええ！！！！

さつき起業したとか言ってた…けど、…AKIYAMAグループの
母体を起業した？

いやいやいや…

「理人さん、そろそろお時間です。」

！？

理人君に話し掛ける人…それは隣の住人、ジャンさんと…

ジャンさんの後ろにいるのは、ダンさん？

ダンさんも隣の住人…右隣のジャンさんとは反対の左隣の…

苦笑いしてる2人を理人君が紹介してくれる。

「ジャンは僕の個人秘書、ダンはグループ内での警備部門の主任兼
僕のSP。」

ええええええ！！！！

静かに頭を下げる2人に、背中から汗が噴き出す気さえする。
ぐるぐる目の前が回り…

…

…

…

…私は倒れた。

「あれ？」

我が家よりも高い天井。

触りごちがいいシート。

身体を楽に受けとめてくれるベッド…

ここどこ？

「起きましたか？」

「理人君？」

傍にいた気配が動いて、さらに近寄ってきた。

「ここどこ？」

「帝王ホテルのインペリアルスイートです。」

だんだん近寄ってきた理人君はベッド脇に座って覗きこんできた。

「て…」

「帝王ホテルですよ。18になったら、貴女を連れ込もうと予約してたんです。」

「つれっ…」

もう何にも言えません。

少年よ…なんつーエロ顔してるですか…

そんな顔で見られたら、女子センサーが働いちゃうじゃない。

男に誘われてるっていう女子センサー…

「克乃さんにプロポーズをOKしてもらったその足で直行したかったのですが…」

「…ここ5年、男の人と関係持っていないから、枯れてるよ？」

何せ、そういう関係に発展しようかとなると相手がね…

ゆっくり近寄ってくる顔。

本当に綺麗な顔してる。

「僕が潤いをあげますよ。どんなに枯れていたとしてもね…」

「ん…」

ゆっくりゆっくり柔らかな感触が唇を被う。

皐月兄さん…どうやら私、息子さんに食われそうです。

s i d e 理人（前書き）

りっちゃん…こわい

side 理人

―またか

3年間で彼女に手を出そうとした奴ら含め、5人程駆除した。

はつきり言って彼女は見る目ない。

何故こんなにも身近に彼女を見ている人間がいるのに気が付かないんだ。

「克乃さん、彼とは縁がなかったのですよ。」

浴びるように飲む酒を止めさせ、酔った彼女の前にメイク落としのシートとスキンケアセットを置く。

「もう11時です。そろそろメイクを落とさないといけません。」

「りひとくん…だつてえ」

酔って力が抜けて、隙だらけ…

かわいい…これで12歳年上なんだよね。

出会って3年かぁ。

後1年は克乃のガードをきつく固めなきゃね。

「君が理人君だね。私は秋山克乃。よろしくね。」

母の再々再々婚：つまり5人目の結婚相手は日本人だった。
母のお相手はフランス、アメリカ、ドイツ、中国、日本と各国を股に架けている。

今度の相手、皐月さんとは相性がいいらしく互いに溺愛している。
そして、皐月さんの親族で初めて会ったのが、克乃さんだった。
ふにゃっとした笑みを向けて、挨拶をする克乃さんに一目惚れした。
海外に居た時にした銃声のように心に響いた。

「理人君、可愛いねえ。お姉さん目の保養で嬉しいわあ。」

「外国人か、お前は：理人君が戸惑ってんじゃないか。」

「皐月兄さん、鈴音さんといい、理人君といい、ハーレムだねえ。
お家人中、華やかそお。」

ふにゅふにゅな感触が頬にあたり、ドキドキが最高値に達した。

―秋山克乃さん：

僕は完全に一目惚れをしたらしい。

「今日は何のよう？鈴音さんや理人君の紹介だけじゃないんでしょ？皐月兄さん、斡旋するなら年収は1000万以上ね。」

「んゝ残念。今回の物件は身長180センチ、K大卒のイケメンの
イソ弁なんだ。若干年収が引っ掛かるぐらいでお前のどストライク
ゾーンなんだけど：」

克乃さんは一人暮らしをしているせいか、よく家に遊びに来るみたいで、皐月さんは克乃さんの母から頼まれているのか、よく克乃さ

んに恋人候補を紹介しているらしかった。

「克乃さんは玉の輿がいいの？」

「うゝん、女子の夢として？」

「そろそろ現実見ろよ。」

「夢見るだけはタダなのよお」

玉の輿と言う言葉が頭を駆けめぐる。

玉の輿…金持ち…社長…会社…起業……確か…

「理人君、またお姉さんと遊んでね。」

「え、あっはい。喜んで。」

皐月さんとの話を終えたのか、克乃さんが目の前に居た。それから克乃さんが帰った後、頭に固まった起業と事業計画を反芻する。

「ねえ、皐月さん。」

「なんだい？理人君」

克乃さんが去った後の玄関で義父を見上げた。

「日本の結婚可能年齢は18歳だよね？」

「そうだね。」

「今から起業して18歳になったら克乃さんにプロポーズする。」

「…そうかあ。理人君。克乃の家の近くに国内有数の進学校があるんだ。ちなみに国内有数の大学も近い。高校は克乃と楽しい同居ってどうよ？18でプロポーズなら、その前には落としたいよね。」

「臯月さん。Thank you!」

臯月さんのこのノリが鈴音とあうのだろう。

「ただし、鈴音さんがOK出したらね。克乃がどつかの馬の骨に持っていられるなら、僕は理人君が克乃の相手になってくれるのが嬉しいよ。」

「鈴音だって克乃は気に入ってる。OKだと思うよ。」

あれから克乃さんに4年、着く虫を駆除し、鈴音や臯月さん、移動してきた各国の友人達を巻き込み、短期間にグローバルな巨大企業が出来上がった。

克乃さんと付き合いそうになる奴が愛より金の奴らで助かったのは確かだ。

今日の書類はこれが最後かな。

克乃さん、寝てるかなあ。

先日、18でプロポーズしたものの、お付き合いならと返事され、それでも恋人になれるならと喜んだ。

その日は僕のボクも悦んだし…

本当に可愛いんだ克乃さん…

さて、結婚までそんなに長い時間は差し上げませんよ。

外堀をさっさと埋めないとね。

克乃ママとパパのご機嫌も取りに行かなきゃね。

s i d e 理人（後書き）

1年前、初対面、プロポーズ後のお話です。

：どんなに克乃ん好きなのよ。
疲れて化粧も取れかかり、酒でぐだぐだな女見て可愛いとか…
ありえない！

《番外編》 克乃の幸せ、理人の畏（クリスマス）（前書き）

りっちゃん…

《番外編》克乃の幸せ、理人の畏（クリスマス）

「理人君、理人君、理人君！」

「どうしたの？ 克乃さん。」

お家に帰れば、暖かい部屋に美味しい料理…いたせりつくせりだけど…だけど…

「また振られたあゝ……………って、なんで？ 理人君が居るの？ 皐月兄と鈴音さんと過ごすんじゃないかったんだっけ？」

「皐月さんと鈴音は2人でイチヤイチャしてるので居づらくて。」

苦笑するのが可愛い男っているのねって違う違う。

「だから避難してきました。今日は克乃さんが居ないって言ってたから、この作りすぎたご馳走をどうやって食べようか悩んでたんだけど」

帰ってきてくれて良かったって微笑まれたら、お姉さんたまらないや。

「私だって今日は帰ってくる気なかったけどさ、あの男、お見合い相手とデートだって、私が居るのによ？ ドタキャンな上にお見合いしやがった…」

この怨み如何に晴らしてやろうか…

「克乃さんの良さが分からない男なんて最初からお呼びじゃなかったんです。」

撫で撫でしながら慰めてくれる理人君にお姉さんときめきそうだよ。

「さあ、ご飯にしましょう。美味しいご飯食べてお酒を飲んでまったりしたら幸せじゃないですか？」

「それは幸せそうだね。理人君のご馳走なんて本当に幸せ。」

この子のご飯と言ったら、美味の一言に尽きる。

「じゃあ、着替えてきてください。料理を暖めておきます。」

「いたせりつくせり。じゃあ着替えてくるわね。」

ホントにあんな男と過ごすより、いいクリスマスになるわ。
私は寝室に向かい着替えた。

その頃…

「ジャンありがとう。ああ、良いクリスマスを…」

ジャンに頼み、系列企業のそれなりなお嬢さんに克乃さんの男をあてがったわけだけど、上手くいったようだ。

ジャンとの通話を切り、コンロの火を止めた。

「酔わせて寝かしつけたら…つまみ食いぐらいいいよね。」

克乃さんの唇は柔らかくて甘い。気付かれない程度につまみ食いができるかもしれない喜びに震える胸を押さえつつ、盛り付けを完成させていく。

「ホントに楽しいクリスマスだ。」

「お待たせ。本当、美味しそう。見るだけで幸せえ〜。」

こうして2人のクリスマスは更けていった。

《番外編》 克乃の幸せ、理人の畏（クリスマス）（後書き）

克乃さんがビミョーなポジティブで笑えます。

りっちゃん黒い…こうして彼は害虫駆除を果たしていったのでありました。

s i d e 奏（前書き）

克乃
パパ編

side 奏

秋山奏と秋山楓は目の前の娘と甥の息子を前にして戸惑っていた。
先日、甥である秋山皐月が電話をかけてきて、こう言った。

「僕の息子が克乃さんとお付き合いするようになりました。これから色々とお世話になります」

その電話の後、娘は良い年して、高校生に手を出すとは…と、頭を抱えたものの、今日の前に居る二人を見ると娘が手出した訳ではなく、手を出されたのだと気が付く。
確かに年上の女性に憧れる年齢と言うものがあるが…年上過ぎやしないだろうか。

「これ、お土産です」

理人君の手から渡された手土産の袋に目が輝いたのは妻の楓。

「これって…きゃー嬉しいわ」

楓が嬉しそうだ。

全員の視線を一気に集めている手土産とはつい最近テレビで半年待ちと言われていたケーキだった。

「これ、半年待ちなんですよ？」

「いえ、これは僕の店のものです。自前の物で申し訳ないのですが、僕が食べてきた中で五指に入るスイーツなんです」

楓がウキウキと聞けば、何でもないことのように言ったが、これには理人君以外の全員が絶句した。

「父さん：理人君、秋山ホールディングスのCEOなのよ」

娘が困ったように言えば、そのネームバリューの大きさに驚くしかない。

秋山ホールディングスと言えば、この三年で急成長を遂げた会社で、日本でも名だたる会社が買収されていた。

「四年前、初めて克乃さんに出会って、克乃さんの玉の輿の一言に会社を設立したんですよ」

理人君：それは照れて言うことなのだろうか？

しかし、娘にそこまでの魅力を感じているのが凄いと言うか：

「うちの会社も先月、買収されました。理人君はうちの会社の社長兼任なの」

「克乃さんと一緒に働くためです」

愛されすぎて困ると言っていた昔の楓の様な表情をする克乃に父親としては複雑極まりない。

克乃の隣に座る理人君の顔が急に大人びた真剣な顔になる。

神妙な面持ちで姿勢を正されてしまえば、次の台詞は決まっている。

「奏さん。楓さん。克乃さんと結婚させて頂けますか？」

「理人君！」

克乃が慌てている。

今日、克乃はそういうつもりで来なかったんだろうな。で、理人君は外堀を埋めに来たと。

プロポーズしたが、克乃に怖じ氣つかれたんだろう。

皐月からも頼まれたんだ。

克乃も良い年だからには、何とかしてやろう。

「可愛い息子ができるとは嬉しいな。なあ、楓」

呆氣に取られていた楓に振れば、楓はしばらく考えてニツコリ言った。

「こんな綺麗な子が義理の息子だなんて…是非ともお義母さんとデートしてくれる？」

「ちよっ！お父さん、お母さん！」

さあ、克乃。

外堀は埋められたぞ？

どうするのかな？

s i d e 奏（後書き）

あら、外堀埋められちゃった…

《番外編》チョコレートナイト

「理人君。湯煎終わったよ」

「メレンゲ、そろそろ終わるから、こっちに下さい」

「うーん。バレンタインに彼氏「婚約者」婚約者と一緒にチョコ「チョコレートタルト」作るとは思わなかった」

理人君が「バレンタインはチョコレート要らないんで克乃さんの時間を下さい」って言ったのが一月前の話。

仕事をどうにか定時に終わらせ帰ってくると、理人がバラの花束を持って出迎えてくれた。

それから、二人でバレンタインの夜らしい食事を作り始めた。

ようやくデザートをオーブンに入れるまでに仕上げ、焼き上がるまでにブロッコリーとエビのオイル系スパゲッティとコンソメスープに生ハムを使ったサラダを作る。

理人君は本当に手際がいい。

二人して洗い物が付けば洗うを繰り返すうちに食べる前にはすでに食器以外は片付いている。

理人君と料理をしていると、お互いが補いあっているとさえ感じてしまうのだ。

「食べ始めちゃおうか？」

「はい。」「いただきます」

理人君がイベントごとに用意してくれるお酒も頂きながら食べる食

事はミルクチョコレート並みの甘さだと思う。

それに！……「克乃さんのオイル系パスタは絶品ですね」なんて、理人君は人を誉めることも忘れない。

高校生ながら本当に良い男なんだと思う。

「さて、デザートも食べますか？」

「食べる食べる。」

理人君（の料理の腕前）愛してる！何このパイ生地的美味しさは！出されてきたタルトを一口食べれば幸せの味。

本当に美味しい。

「後は僕が片付けますから、休んでいてください」

甘い物を食べた幸せ感を堪能したら、ちょっとラグでゴロゴロなんて……幸せ！

本当に胃袋捕まえられちゃってるわ。

な～んて、うとうとしてれば、その後を襲う浮遊感に少し冷えてる寝具が当たった背中に熱い吐息混じりの口付け……

そして聞き捨てならない一言。

「チョコクリーム。たくさん作っておいたんで、デコレーションさせて下さいね」

………なんですって？

「克乃さん。立てますか？」

立てますか？ じゃないよ！ 何あの変態プレイ！
全身、べっとべとなんだけどお！

「甘い克乃さんを頂けて、僕は幸せです。さあ、お風呂に行きましようか？ 甘い夜は始まったばかりですよ？」

いや～～～！

もうお腹いっぱいなのぉ

チョコレートナイトはまだまだ終わらない

《番外編》 チョコレートナイト（後書き）

∴日頃リウマさんメインにしてるから、こっち甘！やば…砂吐く
ザー）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8478n/>

王子様の思うがままに

2011年2月14日23時12分発行